

## 日本語例文バンク (Jreibun) における例文の質の向上と英訳の工夫

鈴木智美・中村彰

キーワード：「Jreibun」(日本語例文バンク)、例文データベース、例文、英語対訳、文構造、意味・内容

### 1. 本稿の目的

本稿の目的は、「日本語例文バンク」(Jreibun) プロジェクト<sup>1</sup> (日本学術振興会科学研究補助金(基盤研究(B))「辞書サイト・アプリ開発に資する質の高い日本語例文バンクの構築とその応用研究」<sup>2</sup> 令和3(2021)年度～6(2024)年度 課題番号:21H00535, 研究代表者:鈴木智美、研究分担者<sup>3</sup>:清水由貴子、中村彰、加藤恵梨、伊達宏子、望月源)の進捗状況を記すとともに、プロジェクトにおいて作成している例文の質の向上のポイントと、英訳の工夫について報告を行うことである。

### 2. 日本語例文バンク (Jreibun) プロジェクトの概要および進捗状況

この研究プロジェクトの目的および概要については、鈴木他(2022)にてその第1回公開研究会の報告とともに述べられている。日本語学習者は現在、辞書機能を有したアプリ、ウェブサイト等の種々の学習ツールを活発に使用しているが、それらのツール開発に利用可能な日本語の例文データベース(英訳付き)を作成し、オープンデータとして公開することを目的としたプロジェクトである<sup>4</sup>。

これまで鈴木(2012, 2016)および鈴木他(2018, 2019b, 2020)等で、日本語学習者の辞書等の学習ツールの使用実態の調査研究が継続的に進められ、鈴木他(2020)および鈴木編(2020)では、日本語学習者の学習ツールの使用状況の解明を教師の教育支援リテラシーへとつなぐ考察と報告が行われている。そして、それらの研究を通じて分かったこととして、鈴木他(2019a, 2020, 2022)等では、大きく以下の2点が指摘されている。1つは、近年、学習者は辞書機能を持つアプリやウェブサイトを活発に使用しているが、そこに提示される例文が必ずしも日本語教育の観

<sup>1</sup> 日本語例文バンク「Jreibun」プロジェクトのホームページは下記の通り。

[http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/SUZUKI\\_Tomomi/jreibun/index-jreibun.html](http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/SUZUKI_Tomomi/jreibun/index-jreibun.html)

<sup>2</sup> 科学研究費補助金の当該研究課題のページは下記の通り。

<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-21H00535/>

<sup>3</sup> 令和3(2021)年度の研究分担者には、藤村知子(東京外国語大学)も含む。

<sup>4</sup> 本プロジェクトは例文のデータベースを作成し、学習ツール開発者が利用可能なようにそれをオープンデータとして公開するものであり、本プロジェクトにおいて独自の辞書を作成したり、新たな学習サイトを作ったりすることを目的とするものではない。ただし、この例文データベースは、学習ツール開発に使用されるだけでなく、例えば日本語教師が授業で使う例文のヒントを探すために検索を行うなど、その作成・公開とともに新たな活用の可能性が広がってくることも予想される。

点から見て精査されたものとなっていないため、例文の質を向上させる余地があるということである。そしてもう1つは、作成した例文をツール開発等において広く利用可能とするためには、例文のデータベースはオープンデータとして提供される必要があり、これまでに出版されてきた辞書や教材、あるいは構築・公開されてきた種々のウェブサイト等が、いずれもそれらの内部で完結し、作成された例文が他のツール等と共有されるということのない形をとっているのは異なり、例文データの提供のあり方について発想を変えて取り組む必要があるということである。この結果を受け、本研究プロジェクトでは、日本語教育に資するために、質を整えた例文データベース（例文バンク）を作成し、それをオープンデータとして公開することとしている。

例文作成の「きっかけ」となる語・表現は約 10,000 項目<sup>5</sup>を用意し、研究代表者（本稿の筆頭執筆者）と研究分担者、および研究協力者の全 15 名（いずれも日本語学・日本語教育を専門とする者）で分担して例文を作成している。例文の英訳については、日英翻訳の専門家に全例文の英訳を依頼の上、言語学・日本語教育を専門とし、英和辞典の執筆等の経験を有する研究分担者（本稿の第二執筆者）が最終チェックを行うこととしている。研究初年度の 2021 年度には約 2,300 項目、計約 3,900 例文の作成が行われた。2022 年 11 月現在、それらの例文については英訳の最終チェックに入っており、同時に 2022 年度分作成例文の集約も行われているところである。

### 3. 例文の質を向上するために注意すべき点

#### 3.1 例文作成の基本方針

鈴木他（2022）においても詳細が述べられているが、本プロジェクトにおける例文作成の前提となる考え方は、以下の3点にまとめられる。まず、アプリやウェブサイトで利用されることを考え、例文は通常の辞書とは異なり、いわゆる「全方位」型のものとなること、つまり1つの例文は、作成のきっかけとした1つの項目のみに対応するわけではなく、その例文中に含まれるあらゆる語・表現からアクセス可能な素材となるということが挙げられる<sup>6</sup>。2つめは、通常の辞書や教材とは異なり、きっかけとなる項目が例えば初級レベルで扱われる文法項目であったとしても<sup>7</sup>、必ずしも初級語彙によってその例文を作成しなければならないということではなく、あくまで現実の言語使用を考えて適切な例文を作成するということである。そして3つめは具体的に例文作成の際に留意すべき各点となり、動詞等の各活用形や接続する種々の文末形式など、形式の多様性に目配りすること、多義的意味を考え、使用頻度の高い派生的意味についても例文を提

<sup>5</sup> 鈴木他（2022）に記した通り、例文作成の「きっかけ」となる項目（それを中心として例文を作成する語・表現）は、「日本語能力試験出題基準」旧4級～1級までの語、『日本語コロケーション辞典』見出し項目、「日本学術共通語彙リスト」（松下達彦氏作成）の見出し項目、初級～上級レベルの文法・語句等の項目（『初級日本語』『中級日本語』『上級日本語』いずれも東京外国語大学留学生日本語教育センター編著）等を参考として、相互の重複を削除して抽出した。

<sup>6</sup> アプリ・ウェブサイト等のツール開発においては、例文データは基本的に形態素解析を経て使用されるため、必ずしも従来の書籍タイプの辞書等のように、ある1つの例文が1つの項目のみに対応する形で掲載される必要はなく、ツール側の設定次第で、1つの例文がその例文に含まれる様々な語・表現からアクセス可能な素材となり得る。なお、ツール開発を目的としない利用者もあることを考えた場合には、どのように利便性のある形態でデータ提供が可能かについては検討中である。

<sup>7</sup> 例文作成のきっかけとなる項目の中には、例えば「～たい」「～ておく」「～てみる」「～かどうか」「～うちに」「～なければならない」「～ことがある」「～そうだ」「～はずがない」「～わけではない」等の文法項目も約 110 項目含まれている。

示すること、その際には、必要となる補語あるいは慣習的に結びつく語句（コロケーション）等、共起する表現に目配りすること、さらに、具体的にどのような文脈でどのようなことを述べる場合にその語・表現が使用されるかをよく考え、的確に文脈を整えること、そして、社会的・倫理的に見て内容的な適切さに配慮するという各点である。

作成された全例文は研究代表者がすべて目を通し、研究代表者が直接修正を加えていくか、あるいは必要に応じて作成者に修正を依頼することになっている。2021年度、研究代表者が直接修正を加えた例文はかなりの数に上ったが、このように研究代表者が直接修正を加えたものを含め、例文作成の担当者に修正依頼を行わずに採用となった例文は全作成例文の約半数であり、残りの半数については作成担当者に修正依頼が行われ、作成担当者と研究代表者の間で複数回の修正のやりとりが行われたものもあった。これらのチェック・修正作業を通して、質の良い例文を作成していくために、具体的にどのような点に留意する必要があるか、さらに見えてきた具体的なポイントを以下に示したい。ポイントとなる観点は、文の構造、語義、文脈、内容の4点である。

### 3.2 文の構造が明快であること

まず、質の良い例文とするために必要なこととして、文構造が明快であることは必須である。主なポイントとして、名詞修飾部分が長過ぎるのは避けること、並列構造や、「の」で結ばれる名詞句などの場合には、要素間の関係が不明瞭にならないように注意すること、文頭における唐突な指示詞の使用を避けること等がある。文の構造によって例文の理解が妨げられることは避けなければならない。

#### 3.2.1 名詞修飾部分が必要以上に長くなるのを避ける

例文作成に限らず一般的な文章作成の際の注意点にも通じるものであるが、名詞修飾部分が長過ぎると文意をとる負担が増し、読みにくさが生じる。以下にいくつか例を挙げる。修飾部分に下線を付し、被修飾名詞には二重下線を付している。さほど修飾部分が長いとは感じられない例もあるかもしれないが、質の整った例文を提供するためには、文構造の明快さは重視すべきものとする。各例文の矢印以下に示したのは、研究代表者による修正案の一例である。修正案としてこれをそのまま採用したものや、これを参考として作成担当者により修正が行われたものもある。修正案には、修正箇所として特に着目してほしい箇所がある場合、波線を付している。例文末尾の【 】には、その例文が作成のきっかけとしている語・表現を記した。なお、きっかけとなる語・表現からは、ここに挙げた例文のみが作成されているわけではなく、ほかにも複数の例文が作成されている場合が多い。

- (1) 津波によってもたらされた甚大な被害からの復興には長い時間がかかりそうだ。

【もたらす】

→ 津波によってもたらされた被害は甚大であり、そこからの復興には～。

- (2) 伝統的な手法を用いて作る江戸切子のグラスにモダンなデザインを取り入れた商品が若者を中心に人気を呼んでいる。【手法】

→ 江戸切子は伝統的な手法を用いて作られるガラス製品だが、最近ではモダンなデザインを取り入れたものも多く、若者や外国人などにも人気がある／などの人気を集めている。

- (3) 好きな音楽を2、3曲聞くと、同じようなジャンルの音楽を数珠つなぎで紹介されるサイトは、便利だが聞く音楽が偏ってしまう不安もある。【数珠つなぎ】  
 → 音楽サイトで好きな音楽を2、3曲聞くと<sup>8</sup>、同じようなジャンルの音楽が次々と数珠つなぎで紹介される。好みに合った曲をすすめてくれるのは助かるが、聞く音楽が偏ってしまう不安もある。
- (4) テレビにはデザイナーが作った服を身にまとったトップモデルたちが次々とステージの上を歩くファッションショーの様子が映し出された。【モデル】  
 → 大都市で開かれる大きなファッションショーでは、トップモデルたちがデザイナーズブランドの最新の服を身にまとい、颯爽とステージの上を歩いていく。

(1)～(4)では、いずれも名詞修飾部分が長く、それを解消するためにそれぞれ文構造を変えた修正案を提示している。(2)(3)の修正案においては、例えば「人気を呼ぶ」「便利」などの語・表現が、ここで述べられている文脈に合ったものとなっているかという点についても再考を加えている。「人気を呼ぶ」からは一時的なブーム、瞬間的な人気の高まりのような意味が感じられること、「便利」については、検索の手間が省けるなど、対象となるサイトが何らかの意味で「うまく使える」という状況が明確でない場合には、やや違和感が感じられることなどをふまえたものである。また(4)については、ファッションショーの様子を描写することで例文としては十分であり、それがさらに「テレビに映し出された」という構造の中に入れ込まれる必然性は薄いと考え、修正案を提示している。

### 3.2.2 並列構造等の要素間の関係を明瞭にする

並列構造等を用いる場合、あるいは「の」によって名詞句を接続する場合などには、要素間の関係が不明瞭にならないように注意が必要である。

- (5) 店内で店員が近づくと避けたりきよろきよろしたりしたら挙動不審な客だと思われる。【挙動】  
 → 店内で、むやみにきよろきよろしたりするのはやめたほうがいい。挙動不審な客だと思われるだろう。
- (6) ウォーキングをするときは、顎を軽く引き背筋を伸ばして、肩の力を抜き腹筋を意識して、リズムよく歩きましょう。【顎】  
 → 健康のためウォーキングをするときは、顎を軽く引き、背筋を伸ばして、リズムよく歩くとよい。

(5)は、「～と、～たら」と条件節が二重になっており、さらにその内部に並列構造（～たり、～たり）が含まれ、構造がわかりにくくなっている。具体的には「近づくと」の帰結部がどこからどこまでなのかが明確ではない。修飾関係を丁寧に考え、文内のどの要素がどの要素と関係しているか明快な構造にしたほうがよいと思われる例である。修正案では、例として挙げる行動を

<sup>8</sup> 不特定の「ある音楽サイトで音楽を聞くと」という意味である。

1つに絞っている。(6)は下線部分に4つの身体動作が並列的に示されているが、それらの相互の関係性がわかりにくい。テ節は多様な意味を持つため、羅列すると相互の意味が曖昧になる可能性がある。この場合、連用中止形も混ざっており、それが順序動作を表しているのか、付帯状況を表しているのかもわかりにくく、取り上げる身体動作を厳選したほうが文構造が明快になると思われる。

(7) WORD ファイルを PDF 形式で保存したい場合は、「名前を付けて保存」のファイルの種類から PDF を選べば、PDF として保存される。【保存】

→ 入力した文書ファイルは、保存形式を選べば PDF としても保存することができる。

(8) Excel でデータの数値を多い順に並べるとき、「並べ替えとフィルター」の「降順」を使用する。【順】

→ 表のデータを数値の大きい順に並べたいときは、並べ替えの機能を使って条件を「降順」に指定する。数値の小さいほうから並べるなら「昇順」だ。

(7) (8) では、いずれも製品名などの固有名詞についてはあえて出さなくてもよいと思われる。「名前を付けて保存」「並べ替えとフィルター」などの文言も、あるアプリケーションソフトのメニューとして示される用語をそのまま「」内に示しているものと思われるが、後続する「の」の意味も曖昧なため、一読してこの「」内が何を示しているのかがわかりにくい。表示されるメニューの用語をそのまま用いたいならば、少なくとも「プルダウンメニューから「名前を付けて保存する」を選び、ファイル形式を指定すれば」などと、丁寧に述べる必要があるだろう。ここでは、特に固有のメニューをそのまま引用する必要はないと考え、より一般的・客観的に操作方法を説明する表現に修正した案を示している。

### 3.2.3 唐突な指示詞の使用を避ける

指示詞を唐突に文頭に用いると、それが何を指しているのかが不明であるため、例文としては不自然なものとなるので避けた方がよい。

(9) このコンサートホールでは海外の有名なピアニストがコンサートを行うこともあるらしい。【ホール】

→ 市の新しいコンサートホールが完成し、こけら落としに海外の著名なピアニストのリサイタルが決定した。

(10) この画家は、平凡とも言える人々の日々の営みを魅力的に描いている。【営み】

→ 一流の画家の手にかかると、平凡とも言える人々のごく当たり前の日々の営みもキャンバスの上に生き生きと描き出される。

(11) その学校の生徒は、とても礼儀正しく規律を守るという評判だ。【規律】

→ 近所の小学校は地域の教育モデル校に指定されており、生徒たちが皆礼儀正しく、規律を守ると評判だ。

(12) あのサッカー選手は血のにじむような努力により、レギュラーポジションを獲得した。【ポジション】

→ 世界の一流選手が集う中、血のにじむような努力なくして、レギュラーのポジションをつかむことはできない。

(9) のもとの例文では、「海外の有名なピアニストがコンサートを行う」ということが「らしい」という伝聞に基づく推定の形式で述べられており、話者がそれにより当該のコンサートホールについてどのようなことが言いたいのか、文意が明確ではないため、その点も含めて修正案を提案している。(10) (11) は「この」「その」を解消して、対象となる「画家」や「学校」がどのようなものなのかを示し、(12) については、「あの」を用いて特定の人物を指し示すよりも、一般論として述べる修正案を提案している。

### 3.2.4 その他

文の構造を明快なものにするためには、そのほかにも種々のポイントが関係してくる。そのいくつかの例を示す。

(13) 引っ越しするため本を段ボールに詰めたが、重くなってしまったので、底にガムテープを貼って、破れないように補強した。【補強】

→ 本を段ボール箱に詰めて運ぶなら、あらかじめ箱の底にガムテープを十字の形に貼るなどして、補強しておいたほうがいい。

(14) 論文を書くためのデータが消えてしまい、もう元に戻らないと焦っていたが、バックアップが残っていたのでホッと胸をなでおろした。【ほっと】

(13) は、実際には、確かに「やってみたら、重かった。だからテープを貼った」ということが生じたのかもしれないが、このことを「例文」として整えて示すためには、「～が～したら、～だったので、～た」という時系列の羅列構造にしないほうがよいと思われる例である。また、「段ボール」は話し言葉ではこのような省略されるかもしれないが、この場合は動詞「詰める」とのコロケーションを考えれば「段ボール箱」と正確に示したい。また、補強のためにガムテープをどう貼るのかも、具体的にイメージできたほうがよいと思われるため「十字の形に」を補うことを提案している。

(14) も、日常的な表現としてはこのままでも文構造の問題は特にないかとは思われるが、「AがBでCだったが、DだったからEはFだった」というように、出来事（経験したこと）を順にただ並べる形にせず、例文として明快な形に再構成する必要があると考えられる例である。示されている状況も、口語表現的にやや端折られつつ述べられているため、「データが消えた」というのは具体的に何が起こったのか、また「バックアップ」がどこに「残っていた」ということなのかなど、正確にはわかりにくい点がある。また「焦る」がやや俗語表現的に用いられており、本来の意味から「焦る」はやはり時間的に追い詰められる感覚を伴うと思われるが、この文脈で最もふさわしい表現かどうかという点なども検討の余地があると思われる。ここでは特に修正案は提示していないが、この例文の作成のきっかけとなった「ほっと」という項目については、最終的に異なる文脈の例文が再作成されている。

(15) ゴシック様式の「崎津教会」は、世界遺産に登録された天草下島の静かな漁村の集落にある。【漁村】

→ 世界文化遺産に登録された熊本県天草の漁村、崎津集落は、隠れキリシタンの里として知られている。

(16) トラック競技の中で、「3000m 障害」は大きなハードルや水濠を飛び越えなければならず最も過酷な競技と言われている。【障害】

→ 陸上「3000メートル障害」は大きなハードルや水濠を飛び越えなければならず、トラック競技の中で最も過酷な競技と言われている。

(15) は、「ゴシック様式の「崎津教会」は」と、特定の建築様式を持つ固有の建物名が唐突に主題として示される構造にやや違和感が感じられ、このような事物の存在を示すならば、むしろ「～の集落には～がある」という構文のほうが自然ではないかと思われる。「集落」の修飾部分も長く、「世界遺産に登録された天草下島」という連体修飾節が、そのまま「の」を介して名詞句の修飾部分になっていくという入れ子構造もややわかりにくさを感じさせる。「漁村の集落」の「の」の意味も曖昧性を残し、「漁村」と「集落」が同格なのか、それとも「漁村」の中に「集落」があるという意味なのかもわかりにくくなっている。この村の特徴を出すならば、「隠れキリシタン」というキーワードを入れたほうがいいのではないかということを含めた修正案を提案している。

(16) は、陸上競技のことが話題になっているというような前提がない中では、冒頭に「トラック競技の中で」と陸上競技の下位分類にあたるものを置き、それを範囲として設定して個別の「3000メートル障害」について述べていくという構造にやや違和感が感じられる。また、文中に「陸上」というキーワードも含まれていない。この場合はむしろ「陸上 3000メートル障害」（と呼ばれる競技）は」と、「過酷」とされる競技自体を主題に据えたほうがよいのではないかということを含めた修正案を示している。

(17) 不祥事のあった会社の会見がようやく行われたが、遅きに失した感は否めない。【否めない】

→ 不祥事を起こした会社がようやく会見を行ったが、遅きに失した感は否めない。

(17) は、文構造に特に問題があるというわけではないが、後半で「遅きに失した感」があるとしているように、これは「会見」自体についての良し悪しを述べるものではなく、むしろそれを行った「会社」の対応が遅すぎ、不十分であったことを述べるものとなっている。このことから、前半部分についても、「会見」を主体とするよりも、動作主体として「会社」を明示する構造をとったほうがよいと感じられる例である。

(18) その旅館は人里離れた山の中にあり、駅まで送迎バスが迎えに来てくれた。旅館までは、途中から舗装されていない道になり、ずいぶんとバスの揺れが激しくなった。【舗装】

→ 静養先の旅館は人里離れた山の中にあり、駅まで送迎バスが迎えに来てくれた。舗装されていないでこぼこ道を 30 分ほど揺られると、木立の中から思ったより立派な作り

の旅館が姿を現した。

(18) では、まず、冒頭に唐突に指示詞を置くことは避けたほうがよい。また、例文の前半部分の客観的な描写文と異なり、後半の「ずいぶんとバスの揺れが激しくなった」という部分で、「話者が今、バスに乗って移動している視点」となるところに修正の余地があると考えられる。小説などの文章とは違って、例文として視点は統一したほうがよいと思われる。例文作成者は、例文を作成する際に、当該の語・表現がどのような文脈で使用可能かを考えるため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』（国立国語研究所）等の資料を参照しており、小説等の場面描写に影響されてしまうこともあるのではないかと考えられるため、注意が必要である。

### 3.3 語義を的確にとらえること

例文においては、作成のきっかけとなる項目、あるいは例文中に使用される様々な語・表現について、その意義を的確にとらえることは必須条件となる。

(19) 旅行から戻るとたくさん郵便物が届いており、対応に追われた。【戻る】

→ 旅行から戻るとたくさんの郵便物が届いており、1つ1つ確認するのに時間がかかった。

(20) 次年度の PTA 会長が決まらず困っていたら、今年度の副会長が立候補して一役買ってくれた。【一役】

→ 次年度の PTA 会長に立候補者がおらず困っていたら、顔の広い山本さんが一役買っ出て、知り合いの保護者に話をつけてくれた。(作成者による修正案)

(19) では、旅行中にたまった郵便物を片付けていく状況では「相手」が特に想定されないため、「対応」ではなくむしろ「処理」という表現が適当なのではないかと思われるものである。また、「追われる」という表現も、次から次へと時間的に催促等が来ているような文脈でなければ、ややそぐわない感がある。(20) の「一役買ってくれた」は、この場合、最終的に PTA 会長が決まるということに何らかの形で貢献したことを表すものであるため、自分がそれに立候補して決まるという直接的な行動を表すより、むしろ仲介役やお世話役などの役目を進んで引き受けるというような文脈が適切なのではないかと思われるものである。

(21) 物事には善と悪の両面がある。例えば、自動車が、長距離移動に便利である点は善と言え、事故を起こして死者を出す点は悪と言える。【悪】

→ たとえ幼児であっても、物事の善悪はきちんと教えるべきである。例えば、人に嘘をつくことや暴力をふるうことはよくない行いであり、許されるものではない。(作成者の修正案をもとに再修正)

(22) 中学受験をして中高一貫校に行こうと思ったのは、高校受験で苦労したくないと思ったからだ。【受験】

→ 息子に中学受験をさせて中高一貫校に進学させたのは、高校受験で苦労するよりも、6年間を通じてのびのびと学んでほしいと思ったからだ。



(21) のもとの例文で取り上げられているのは、自動車における便利な面と危険な点であって、倫理的な善悪とは言えないと思われるものである。(22) は、生徒本人が「苦勞」という表現を使うことにやや違和感が感じられる。大学生になってから、あるいは成人後に振り返っているのだとしてもそれを示す文脈が必要であり、どのような状況で述べているのかわかりにくいいため、この語を使うならばむしろ親の視点のほうがふさわしいと考えられるものである。

(23) 日本人に多い名字の具体例を挙げると、佐藤、鈴木、高橋、田中などがある。【挙げる】

→ 日本人によく見られる名字の中で比較的単純なものと言えば、山や田など、自然の風物を漢字で組み合わせたものである。具体例を挙げると、「山田、山川、山野」などである。

(23) では、あえて「具体例」と言うまでもなく、単に「日本人に多い名字は、佐藤、鈴木、…などである。」と述べれば十分なものとなっている。「具体例」ということは、総括的に述べられたことについて、その例を示すものなので、仮に「日本人に多い名字は、山や田など、自然の風物を漢字で組み合わせたものだ」という総括的な説明があったなら、「その具体例は～」と続けることができる。

### 3.4 文脈を整えること

その例文が結果的に何を言おうとしているのかが不明瞭にならないよう、注意が必要である。また、話し言葉のままに、いわゆる「端折った」表現をそのまま提示するのではなく、例文として整えた形になるように注意したい。これは、発話される状況をすべて例文の中に書き込むという意味ではなく、また、例文をすべて作成者個人の実感に照らして、作成者個人の経験や感想として述べるという意味でもない。

(24) 職場で終えることができなかった仕事を家に持って帰り、続きをした。【持って帰る】

→ ～、夕食後12時までかかって何とか終えた。

(25) いつもバスに乗っているところを歩くようにしたら、バス代が浮くばかりでなく健康にもいい。【浮く】

→ 停留所4つ分ぐらいなら、バスで通わず歩くようにすれば、バス代が浮くばかりでなく健康にもいい。

(26) 駅に着いたらものものしい警備体制がしかれており、驚いた。今日は一体何があるのだろう。【物々しい】

→ 海外の要人が出席する国際会議場周辺では、ものものしい警備態勢が敷かれていた。

(27) 消費者へのアンケート調査の結果をもとにしてサービス向上を図る。【元・基】

→ 消費者を対象としたアンケート調査の結果をもとに問題点を洗い出し、サービスの向上を図る。

(24) は「続きをした」が口語的にやや端折られた表現となっている。(25) も「いつもバスに乗っているところ」だけではなく、より一般的かつ具体的なイメージが可能なようにその距離感

が示されるとよい。(26)は、「ものものしい警備体制」というのがどのような時に行われるものを意味しているのかがわかるように、「海外の要人が出席する国際会議」などの情報を示し、例文として整えたほうがよい。(27)は「もとにして」の前後でやや話が飛んでおり、調査結果をどうすることによって「サービス向上」を図るのかを示したほうがよいと思われる例である。

(28)地道に念入りに取材を続けることで、貴重な情報を得られることがある。【取材】

→ 「記事は足で書け」と言われる通り、記者は地道に念入りに取材を続けることで、見えなかった大事なものが見えてきたり、貴重な情報を得ることもある。

(29)安心した途端、全身の力が抜けて何もできなくなった。【全身】

→ 生まれて初めて国際的なシンポジウムで発表し、よほど緊張していたのか、終わった途端に安心して全身の力が抜けた。(作成者の修正案をもとに再修正)

(30)散歩をしている時に、よいアイデアが浮かぶことが多い。【浮かぶ】

→ 散歩をしたり、家事をしたりするなど、別のことをしている時に、仕事上のよいアイデアが浮かぶことが多い。

(28)～(30)は、いずれも短文として見れば形は整っているが、情報が不足しており、何について述べているのかがわかるように、的確な文脈を補ったほうがよいと考えられる例である。

(31)田中さんは会議が終わり社長がいなくなると、シャツの第一ボタンを外して「疲れたな」と言った。【ボタン】

→ 赤字経営が続く中、定例の経営会議は非常に厳しい空気の中で行われた。会議が終わり、社長が退席すると、出席していた各セクションの責任者は一様にネクタイをゆるめ、ため息をついた／疲れた表情を見せた。

→ シャツのボタンを一番上まで止めると苦しいなら、首周りのサイズを1つ大きいシャツに変えたほうがいい。(作成者の修正案をもとに再修正)

(31)は、小説等の一場面が切り取られたような文となっているが、「社長がいなくなると」という表現を入れるならば、「社長の前では～だが、いなくなって初めて～する」という意味が生きるように、文脈を整えたほうがよいと考えられる。社長が「いなくなる」というのもやや口語的に端折られた表現となっており、会議の場から「退席する」などの表現を取り入れることについても検討の余地がある。しかし、この例文は「ボタン」を作成のきっかけとしたものであったため、最終的には2つめの矢印で示したように、「ボタン」を文中に含む別の例文を再作成することとなった。

(32)近所のマンション建設の工事が順調に進み、予定通りの日程にマンションが完成した。

【順調】

→ 購入したマンションの建設工事は順調に進み、予定通りの日程に完成した。あとは引き渡し日を待つばかりだ。

(32) では、単に「近所」のマシンのことであるならば、なぜその工事が「順調」であり、「予定通り」に完成したことを述べる必要があるのかという点が不明瞭となる。例えば、工事現場監督者や建設業者、売主や買い主など、工事が「順調」であることは、そのことの影響を受ける人の目で発話されるのではないかという点を踏まえた修正案である。

### 3.5 内容面における配慮

作成例文は、非常に多岐にわたる内容のものとなっているが、言うまでもなく、社会制度、法律、自然科学や技術開発等に関わる内容の場合には、事実確認を行うことが必須となる。「日本の～は～である。」など、日本の産業や社会に関する記述なども、指している時代等に注意する必要がある。

また、下記 (33) は「細かい」、(34) は「ひょろり」という項目をきっかけとして作成された例文で、もとの例文は、日常的にはもちろん発話される可能性のあるものではあるが、ルッキズム等の観点からは再考の必要があり、結果的に (33) の例文はまったく異なる内容に修正が行われている。

(33) ふくらはぎを細くしたいんですが、いい方法がありますか。【細かい】

→ ボールペンの芯は、細いもので0.3mm、太いものは1mmのものもあるが、小さいスペースに書き込む場合は細い方が書きやすい。(作成者による修正案)

(34) ひょろりとした彼は、背が高くせに標準体型の私より体重が軽い。【ひょろりとした】

→ 高校時代の僕は、背が高くひょろりとしていて、髪型もマッシュルームカットだったので、当時のあだ名は「マッチ棒」だった。(作成者による修正案)

(33) は文脈も不足しているが、少なくとも外見等、身体的な特徴を例文としてあえて取り上げる必要はなく、内容について再考の余地がある。(34) は、文中の「私」が女性であるという想定だとすると、その背後に「女性は体重が軽い方がよい／女性らしい」というような価値観があると考えられるため、再考の必要があると考えられる。

(35) 日本人は海外旅行に行くと、相手に言われた金額に疑問を持たずそのまま払うので、ぼったくられていることに気がついていないことも多いようだ。【ぼったくる】

→ 旅行先でタクシーを使う際は、運転手に遠回りをされても気がつかず、ぼったくられることもあるので、注意するに越したことはない。(作成者による修正案)

(35) は、「ぼったくる」という俗語表現が作成のきっかけとなる項目であるが、内容自体もやや俗説的なものとなっており、「海外」といってもどこが想定されているか、また「日本人は」というくり方も適当か、再考を要する例となっている。「相手に言われた金額に疑問を持たず」という部分についても、より丁寧に考えれば、品物の価値や取引の相場など、現地の情報に通じていないために交渉できないという背景などもあると思われるため、たとえ俗語表現を用いる例文であったとしても、文脈を丁寧に作成する必要があると考えられる。

#### 4. 英訳における注意点

以上、第3節では例文の質を向上させるための具体的なポイントについて考察を行った。第4節では、例文の英訳の注意点について考える。「Jreibun」の例文データベースは、日本語例文とその英訳のデータによって構成される。すべての日本語例文に英語の対訳を付すこととしており、以下、英訳を付す際に注意が必要と考えられる点について、日本語と英語の言語的相違に由来する注意点、また、制度や文化の違いに基づく、いわゆる「日本的」なもの、あるいは日本事情的な内容を英訳する際の注意点の順に述べる。

##### 4.1 日本語と英語の違いに由来する注意点

まず、最初に取り上げる点は、日本語と英語の基本的な違いに起因する注意点である。日本語は、いわゆる高文脈<sup>9</sup>の言語で、主語や目的語などは文脈上分かれば、省略することが可能で、省略したほうが自然な文も多い。こういった要素を省略しない英語とは大きく異なる。このような違いがあるため、日本語の例文を英訳する際には注意が必要となる。

次の(36a)は「今日(きょう)」についての日本語の例文で、(36b)はその文に対して付された英訳である。以下、各例文番号のa.は日本語例文、b.はそれに対して付された当初の英訳、c.は必要に応じて加えられたその英訳の修正版を示す。場合によっては、a.に日本語例文を示し、b.には微修正を加えた上で、英訳をそのまま示す場合もある。問題となっている箇所には適宜下線を付して示す。

- (36) a. 出張には、今日の午後出発の予定だ。  
b. He is scheduled to leave for a business trip this afternoon.  
c. I am scheduled to leave for a business trip this afternoon.

日本語の文では主語が明示されていない。したがって、主語が1人称なのか、3人称なのか、単数なのか複数なのか、その前の文脈によっては複数の可能性がある。それらの可能性をすべて英訳に書き入れるのは煩雑であることに加え、(36a)を単独で読んだ場合、主語として解釈されやすいのは一人称単数であろうという判断から、(36c)のように英訳を修正した。

次の例も人称代名詞の選択に関わる。(37a)は「いぶかしげ」の例文として作成されたもので、(37b)はその英訳である。

- (37) a. 道を聞くために知らない人に話しかけたら、相手は訝しげな顔で私を見た。  
b. When I talked to a stranger to ask for directions, he gave me a puzzled look.

日本語の例文で「相手」というのは「行為の対象となる人」のことで、ここでは「話しかけた知らない人」を指す。ただし、英語ではこのような意味の「相手」にあたる普通名詞はなく、“the person that I was talking to”のような説明的な訳を使うより、人称代名詞を使ったほうが自然であ

<sup>9</sup> Edward T. Hall (1976) は日本文化を高文脈 (high-context) 文化の例として挙げており、言語外の情報 (文脈) の重要度が高く、言語以外の情報を重視するとされている。これにより、文中の主語や目的語などは、文脈によって何を指すのか分かる場合は、自由に省略することができる。

る。(37a)の主語である「私」は(36a)と同様に日本語では省略されているが、その「私」にとって、話しかけた「知らない人」の性別は分かっていると考えるのが自然だが、日本語だとその「相手」の性別を述べる必要がない。しかし、英語だと“he”あるいは“she”のいずれかの選択が迫られる<sup>10</sup>。

人称代名詞に関わる関連した問題には次のようなものもある。

- (38) a. 上司は会議の席でもお酒の席でも態度が変わらず、部下の話をよく聞くので、皆からとても信頼されている。
- b. My boss is a good listener to subordinates and maintains the same attitude regardless of whether she is in a meeting or relaxing over a drink. So, she has the strong trust of everyone.

(38)は「席」という項目を作成のきっかけとした例文であるが、日本語の例文(38a)では「上司」や「部下」の性別は特定されない。一方、英語では、少なくとも単数形である“my boss”は人称代名詞で受ける必要があり、ここでも“he”か“she”の選択を迫られる。ここで問題となるのは、「上司」のような「権力を持つ人物」を受けの場合に、代名詞の性別をどう選択するかという点である。現代日本では、男性上司の方が女性上司より多いだろうという推定から、安易に“he”を使うというのは、ステレオタイプの押しつけになりかねない。

このような例は、以下の(39)でも見られる。セクシズムのバイアスをできるだけ排除するため、「権力のある人」を受けの人称代名詞には、なるべく女性形も使うようにした。

- (39) a. 新たに就任した大統領は就任演説で「政治生命をかけて国と国民を守る」と表明した。
- b. In her inaugural speech, the new President announced that she would “put her political life on the line to protect the country and its people.”

また、英語では可算名詞には単数形と複数形の区別があるが、日本語ではそれを区別する必要がない。日本語の例文の名詞が単数なのか複数なのかは、場合によっては問題になることがある。以下の(40a)は「公正取引委員会」という項目が作成のきっかけとなっている例文である。「告発した」と過去形が使われていることから、公正取引委員会の役割を一般的に説明するというより、具体的な事例を述べている例文である。ここで使われる「企業」が1社なのか複数なのかは日本語の例文を見ただけでは分からない。英訳では(40b)に示したとおり、企業は複数あったという設定としている。

<sup>10</sup> この「相手」は不特定の人ではないので、ここで“he or she”という表現を使うことはできない。近年は、英語において、性別を指定することを避けるために“they”で単数名詞を受けることが普通になりつつあるが、その場合、多くは以下の(i)のように不定代名詞が先行詞となる。

(i) Anyone can join if they are a resident.

普通名詞を受ける(ii)のような例は、誤用と批判されることが多い。

(ii) Ask a friend if they could help. (McKean (2005) s.v. “they”)

したがって、(37b)のように“a stranger”が先行詞である場合は、(ii)と同様に“they”でこれを受けるのは適当ではないと考えられる。

- (40) a. 公正取引委員会は独占禁止法に違反した企業を告発した。  
b. The Fair Trade Commission pressed charges against the companies that violated the Antimonopoly Law.

次の例は日本語と英語で目的語のとり方が異なる例である。(41a)は「なじる」を作成のきっかけとした例文で、その当初の英訳は(41b)である。「なじる」を“rebuke”と英訳し、その目的語として、日本語と同様「ミス」にあたる“the mistake”が使われている。

- (41) a. 上司は部下のミスを強い口調でなじった。  
b. A superior harshly rebuked the mistake of the subordinate.  
c. The superior harshly rebuked the subordinate for his mistake.

しかし、英語学習者向けの *Longman Dictionary of Contemporary English* や *Oxford Advanced Learner's Dictionary*、および英語母語話者向けの *New Oxford English Dictionary* 等では、“rebuke”は目的語に「なじる」対象の人をとり、その原因については for で説明するとあるのみで、原因となった行動を目的語にとるとはしていない。最大規模かつ最良の質を持つとして定評のある Oxford English Dictionary Online (以下 OED と略) や大型の Merriam-Webster Unabridged Online を調べると、その説明から、対象となる行動を目的語にとることも可能だと分かる<sup>11</sup>が、この場合、“rebuke”の基本的な文型は目的語に人をとるものであると考えられるため、英訳は(41c)のように変更した。

#### 4.2 日本事情的な内容を英訳する際の注意点

次に見ていく注意点は、例文の日本語をそのまま英語に訳しても必ずしも正しく理解されない可能性があるという場合である。(42a)は「仲人(なこうど)」を作成のきっかけとした例文である。

- (42) a. 大学の同じゼミに所属していた彼と結婚することが決まった。仲人は恩師夫妻にお願いしようと思っている。  
b. I have decided to marry a man who was in my seminar group at university. I am planning to ask my mentor and his wife to introduce themselves as our matchmakers at our wedding.  
c. My boyfriend, who was in my seminar group at the university, and I have decided to get married. We are planning to ask our seminar professor and his wife to be our ceremonial matchmakers at our wedding.

(42b)は(42a)の当初の英訳である。ここでは「仲人」が“matchmaker”と訳されている。実際に和英辞典をいくつか調べてみると、「仲人」の英訳として“a go-between; a matchmaker”が訳語

---

<sup>11</sup> 例えば、OED の“rebuke”の定義の 1 b. は“transitive. To find fault with, censure, condemn (a quality, action, etc.).”となっている。

として使われている（『新和英大辞典 第5版』2003年、『プログレッシブ和英中辞典 第4版』2011年）。この“matchmaker”の意味だが、OEDでは“A person who brings about or negotiates a marriage; a marriage broker.”と定義されている。つまり、実際に結婚する二人の縁を取り持った人なら、“matchmaker”を使っても問題ないと思われるが、この場合の日本語の例文を見ると、結婚式の時だけ媒酌人を務めるという意味の「仲人」であると読める。実は「仲人」はOEDには“nakodo”として見出し語に採用されている。しかし、他の大型あるいは中型の英語辞典には調べた限り載っておらず、これが十分に英語化した表現となっているとは言えない。OEDの定義“In Japan: a person who acts as intermediary in arranging the introduction of parties to a possible marriage (cf. MIAI *n.*) and assists in the subsequent negotiations; a person who accepts the formal role of matchmaker at a wedding ceremony whether or not he or she played a role in bringing the couple together.”における下線部分が(42a)の例文における「仲人」の定義としてふさわしいと思われるため、これを参考にして(42c)のように“ceremonial matchmakers”と修正した。また、(42b)では、話者が主導権を持って結婚することに決めたように解釈できる訳となっていたが、(42a)の日本語の例文からは特にそのような読み方は積極的にはなされないため、話者とその恋人の二人で結婚を決めたというように英語訳を変えた。

次の例(43)は日本における教育制度が英語圏のそれと必ずしも同じではないことからくる翻訳の難しさの例である。「内部」という項目を作成のきっかけとした例文で、(43a)の日本語の例文には「内部進学者と外部からの入学者」という表現が使われている。これは例えば、「私立大学に附属高校から入った学生と、それ以外の高校出身の学生」のことを指すと考えられるが、これをそのまま(43b)のように“internal students”と“external students”としても正しく理解されない可能性がある。そこで、(43c)のように説明的な訳に修正した。

- (43) a. 私が通っている大学の学生は、内部進学者と外部からの入学者の割合が半々である。  
b. The student body of my university has a 50/50 split in enrollment between internal and external students.  
c. The student body of my university has a 50/50 split in enrollment between the students who came from its affiliated senior high school and those who came from non-affiliated senior high schools.

制度や文化の違いに起因する、いわゆる「日本的なもの」が例文で取り上げられている場合、単に日本語の単語を、意味の近い英語の単語を使って翻訳しても、必ずしも正しく理解できる英訳になるとは限らないため、その都度、吟味が必要である。

## 5. まとめ

以上、本稿では、「日本語例文バンク」(Jreibun) プロジェクトの進捗状況を記すとともに、作成している例文の質の向上のポイント、および英訳の注意点について報告を行った。

例文の質の向上のポイントとして挙げられるのは、文の構造が明快であること、語義を的確にとらえること、文意が明瞭となるよう文脈を整えること、例文の内容に誤りや偏りがないよう配慮することという各点である。文の構造を明快にするためには、具体的には名詞修飾部分が必要

以上に長くなるのを避けること、並列構造等を用いたり、「の」によって名詞句を接続する場合などに、要素間の関係が不明瞭にならないように注意すること、唐突な指示詞の使用を避けることという点などが挙げられる。その他、文中のどの要素を主題として立てるか、単純に時系列で事態を述べるのが適切かという点なども考慮の余地がある。内容面については、社会制度・法律あるいは科学的事項などについては事実確認を行うこと、述べられている内容に社会的・文化的な偏りがないように配慮し、俗説的なものをそのまま述べることを避けることなどが挙げられる。

英訳の注意点としては、日本語と英語とでは、何が省略できるか、あるいは単数と複数の区別があるかなどという点で基本的な違いがあるため、訳文に複数の可能性が考えられる場合に、適切な選択がなされるよう配慮が必要なこと、日本事情的な情報を含んだ例文は、ある程度説明的な訳を付さないと正しく理解できない可能性がある点などを指摘した。

本稿において考察した内容については、既に例文の質の向上の各ポイントはプロジェクトメンバーと共有しており、また、2022年度の作業において、英訳を依頼する際に例文の意図とのずれが生じないように、例文作成者から翻訳者に宛てたメモを備考欄に付すなどの手順も加えることとしている。例文の質をさらに向上させ、的確な英訳を付すことで、データベースの質を安定した高度なものとし、プロジェクトを引き続き推進していくこととしたい。

(執筆分担：1, 2, 3, 5 鈴木、4 中村)

■本研究は以下の助成を受けて行われている。

日本学術振興会科学研究補助金令和3年度～6年度基盤研究(B)「辞書サイト・アプリ開発に資する質の高い日本語例文バンクの構築とその応用研究」(課題番号：21H00535, 研究代表者：鈴木智美、研究分担者：清水由貴子、中村彰、加藤恵梨、伊達宏子、望月源)

#### 引用文献

- 鈴木智美(2012)「留学生の辞書使用についての実態調査—東京外国語大学で学ぶ留学生へのアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第38号 pp.1-16
- 鈴木智美(2016)「日本語学習者は辞書からどのように言葉を探すのか—中級・中上級日本語学習者7名の辞書使用についての調査報告事例から—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学』第6号 pp.1-23
- 鈴木智美(編)(2020)『日本語学習者の学習ツール使用状況の解明と教師の教育支援リテラシーを結ぶ総合的研究平成29(2017)年度～平成31(2019)年度 日本学術振興会学術研究助成金 基盤研究(C) 研究成果報告書』
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子(2018)「予備教育課程の国費学部留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果から見えるスマートフォンアプリの使用目的の多様化と学習スタイルの変化—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第44号 pp.195-217
- 鈴木智美・中村彰・清水由貴子・渋谷博子(2019a)「ICT時代の日本語学習者はどのような学習ツールを使っているか—日本語教師を対象としたワークショップ実施報告」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp.239-255
- 鈴木智美・清水由貴子・渋谷博子・中村彰・藤村知子(2019b)「東京外国語大学全学日本語プログラムで学ぶ留学生の学習ツール使用状況—2016～2017年度実施のアンケート調査の結果と分析—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第45号 pp.221-238
- 鈴木智美・清水由貴子・中村彰・渋谷博子(2020)「海外の大学における日本語学習者のツール使用状況の



解明 —ICT 時代における教師の教育設計リテラシーの向上を目指して— 東京外国語大学国際日本  
研究センター『日本語・日本学研究』第 10 号 pp.23-48  
鈴木智美・清水由貴子・中村彰・加藤恵梨 (2022) 「日本語例文バンク科研 (Jreibun) 第 1 回公開研究会報  
告 —日本語学習ツールに使用可能な良質な例文をオープンデータで公開する—」『東京外国語大学  
国際日本学研究』第 2 号 pp.191-208  
Hall, Edward T. (1976) *Beyond Culture*. Doubleday

〈辞書・教材類〉

高野フミ・板橋好枝・Mary E. Althaus 編 (2011) 『プログレッシブ和英中辞典 第 4 版』小学館  
東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 (1998) 『上級日本語』  
東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 (2010) 『初級日本語』(上・下)  
東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 (2015) 『中級日本語』(上・下)  
姫野昌子監修 (2012) 『日本語コロケーション辞典』研究社  
渡邊敏郎・Edmund R. Skrzypczak・Paul Snowden 編 (2003) 『新和英大辞典 第 5 版』研究社  
Lea, Diana and Jennifer Bradbery (2020) *Oxford Advanced Learner's Dictionary* 10<sup>th</sup> edition. Oxford University Press  
Mayor, Michael (2014) *Longman Dictionary of Contemporary English* 6<sup>th</sup> edition. Pearson Education  
McKean, Erin (2005) *New Oxford English Dictionary* Second edition. Oxford University Press  
Merriam-Webster Unabridged <https://unabridged.merriam-webster.com/> (最終閲覧日: 2022 年 12 月 24 日)  
Oxford English Dictionary Online <https://www.oed.com/> (最終閲覧日: 2022 年 12 月 24 日)

〈参考資料〉

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』国立国語研究所 <https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/>  
「日本学術共通語彙リスト」(松下達彦研究室) <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/list.html>  
『日本語能力試験出題基準【改訂版】』国際交流基金・日本国際教育協会編著 凡人社 (2002 年)

(すずき ともみ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)  
(なかむら あきら 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授)

# Improving the Quality of Japanese Example Sentences and their English Translations in the Database of “Jreibun”

SUZUKI Tomomi, NAKAMURA Akira

**KEYWORDS:** “Jreibun” (the Bank of Japanese Example Sentences), the database of example sentences, example sentences, English translation, sentence structure, meanings and contents

The purpose of this article is to report the progress of “the Bank of Japanese Example Sentences” (Jreibun) project (“Construction and applied research of the database of high-quality Japanese example sentences available for the development of dictionary websites and applications” (JSPS KAKENHI Grant Number 21H00535, Grant-in-Aid for Scientific Research (B), 2021-2024, Principal Investigator SUZUKI Tomomi)) and to carefully consider the ways to improve the quality of the example sentences that have been created in the project and some points to be paid attention to in their English translations.

Key points for improving the quality of example sentences are as follows: the sentence structures are clear, the meanings of the words are accurately captured, the contexts are properly given so that the intended meanings of the sentences are clear, close attention is paid so that the contents of the example sentences are free of errors and bias.

In translating the example sentences into English, due to the fundamental differences between Japanese and English, such as the possibility and impossibility of omitting contextually clear elements, the distinction of singular and plural forms, it is often impossible to give exactly one correct English translation for a Japanese sentence. Furthermore, it has been shown that in translating sentences that contain concepts and customs that are uniquely Japanese, using words that have similar meanings in English is often not sufficient to accurately convey the meanings of the Japanese example sentences.

Taking the above points into consideration, we would like to stabilize the quality of the database and continue to promote the project by improving the quality of the example sentences and adding accurate English translations.